

1980年6月22日衆参同日選挙における 一貫票の実態—高松市

(一般教育における世論調査資料の教授法昭和55年度報告)

神 江 伸 介

目 次

- 一、はじめに
- 二、調査の概要とサンプルの特性
- 三、世論調査資料にみる一貫票の実態
- 四、おわりに

一、はじめに

1980年6月22日第36回衆議院議員総選挙と第12回参議院議員通常選挙が国政史上初めて同日に執行された。香川大学政治学研究室は「一般教育における世論調査資料の教授法」(一般教育研究活動補助費に基づく)のデータ収集作業の一環として同選挙における高松市民の投票行動の調査を実施した。調査は、有権者の投票行動、党派性関連の諸態度、参加関連の諸態度、そしてデモグラフィックな特性など全般にわたっている。詳細な調査項目は付録に調査表を添えているので参照されたい。本稿では、その中でも、衆議院、参議院地方区、全国区という三つの選挙を通じて同一の政党に投票した者、選挙毎に政党を交叉して投票した者の特性を特に取り上げることにする。論考の中では前者の投票行動を一貫票、後者を交叉票と呼ぶことにする。

この種の研究は、勿論、一貫票という特殊な投票行動を生む態度特性を明らかにするという政治心理学的関心のなかに位置づくが、次のような問題点にも副次的寄与をなすものと思われる。第一に、戦後三〇余年、日本国憲法の下における両院制に対する国民の完熟度がいかなるものかということがわかるとともに、選挙が同時に行なわれることによって両院に対する国民意識が直接比較

できる点である。第二に、参議院議員選挙制度改革が政権政党によって日程に上げられているが、改革問題も制度に対する国民・政党の慣熟度の科学的測定を欠いては片手落ちとなる。この資料は改革の是非論へ至る民意測定の重要な一資料としても検討されるべきである。

二、調査の概要とサンプルの特性

(1) 調査の目的と方法 調査目的は、1980年6月22日衆参同日選挙における高松市民の投票行動の実態であった。調査対象は、選挙当日有権者から第一次産業就業率を基準として国勢調査統計区を、A—非農業的（就業率2%以下）、B—中間的（同2~10%）、そしてC—農業的（同10%以上）に層化し、各層の中から人口に比例して無作為に投票区抽出（A2区、B5区、C2区）を行ない、当該投票区選挙人名簿から1/200の等間隔抽出により選定された⁽¹⁾。調査方法は事後面接調査により、調査期間は1980年6月28日から7月4日である。調査の結果、標本数234名中166名、回収率70.9%の回答が得られた。回収不能の内訳は、拒否—22、長期不在—14、転居—5、病気—7、住居不明—20、であった。調査表は「財団法人明るい選挙推進協会」が全国調査に用いたものと同様のものを九州大学教授植正夫氏の御好意により使用した。結果の計算は九州大学大型計算機センターのSPSS、香川大学計算センターのミニSPSSを利用して行なった。

(2) 立候補状況と結果 一貫票の多寡は各級選挙の候補者数、党派的連携関係によって微妙に影響されるので、高松市における立候補状況（参院香川地方区、衆院香川一区）について、簡単に触れておこう。香川地方区の候補者は改選数一に対して椹昭二（30、共新）、猪崎武典（33、無新、社会推薦）、平井佐代子（46、無新）、平井卓志（48、自現）の四名であった。猪崎については、最後まで社公民共闘が追求されたため立候補意思表示が4月15日になるという出足の遅れを来たすとともに、同地方区の社会党では初の推薦候補となり公認を要求する協会系労組員の不満を呼ぶ等という問題があった。自民陣営では、故平井太郎の遺産相続問題で太郎の次女佐代子が太郎の娘婿卓志に挑戦するという内部分裂が表面化した。更に、同日選挙となって一区の自民陣営が激しい

派閥争いを展開したため有効な地方区の選対活動が出来ないといわれたが、現職の利点を生かし平井卓志の優位は動かなかった。

衆議院香川一区の立候補者は定数三に対して六名である。自民党は木村武干代(70)中曽根派前, 福家俊一(68)福田派前, 藤本孝雄(49)三木派元の三名を公認, 社会党からは党県委員長の前川旦(50)前, 共産党からは党県委員長の石田千年(55)新, そして日本皇民党から松本謙之(33)新が立った。自民陣営では, 衆院本会議欠席組(福家), 出席組(木村)との間で故大平首相への忠誠合戦が展開されるとともに, 解散国会の洗礼を受けていない藤本が再起を期した。社会陣営では, 参院から転進して二度目の前川が「革新の議席死守」を課題とした。

6月22日の総選挙・通常選挙の高松市における投票結果と標本における結果は第一表の通りである。前回(79年10月)の総選挙に比較して自民は約5%得票

第一表 1980年6月22日, 両院選挙の高松市における投票結果, 調査標本における結果
当日有権者数 219,379 (男103,453, 女115,926)

投票率(%)	党派別得票率(%)			
	自民	社会	共産	その他
衆議院 75.92 男 74.83 女 76.90	66.11	28.26	5.53	0.1
調査標本 91.6 男 91.1 女 92.0	55.3	23.0	2.6	19.0 (その他不明)
参議院地方区 75.92 男 74.83 女 76.89	47.96	28.9 (社会推薦)	7.22	15.95 (平井さよ子)
調査標本 91.0 男 89.9 女 92.0	45.8	17.5	4.8	31.9 (諸派・無所属・不明)
全国区 75.90 男 74.80 女 76.87	40.80	12.96	2.32	43.92
調査標本	35.5	12.7	3.6	48.2 (その他の政党・諸派・無所属・不明)

率増，社会3%減，そして共産1%減と，高松市にも「保守回帰」の波が押し寄せて来た。通常選挙では，前回（77年7月）と較べて，地方区では自民4%増，社会23.2%減，共産3%増であり，地方区の市得票率では草保逆転という現象が生じた。

（3） サンプルの特性と一貫票 サンプルの特性については，デモグラフィックなものについてだけ第二表に掲げておく。性では女性が僅かに上回っている。年令では，30代が多く40代が少ない。学歴では中が非常に多く高が少くない。職業では，市全体では8%程度ある第一次産業就業率が若干低くなって

第二表 サンプルの特性

性	%	労組	
男	47.6	加 入	27.0
女	52.4	非 加 入	39.2
		労組なし	28.3
		DK	5.4
年令		所得（万）	
20才～	19.3	～7	8.3
30才～	27.7	7～	10.2
40才～	12.0	10～	20.4
50才～	20.5	15～	18.5
60才～	20.5	20～	12.0
学歴		25～	11.1
低	30.7	不定	8.3
中	54.8	DK	11.1
高	12.7	居住年数	
DK	1.8	～3年	2.4
職業		3～	19.3
農林漁業	4.8	10～	11.4
商工サービス	17.5	20～	66.9
管 理	4.2		
事 務 系	18.1		
販売サービス	7.8		
生産工程	11.4		
学 生	1.8		
主 婦	25.9		
無 職	8.4		

いる。所得は大体10～20万の中位に固まっているようである。居住年数では20年以上の高松市在住者が7割近くを占めている。

本稿で使用する一貫票・交叉票の定義を行なっておこう。もし使用するデータが公的選挙結果であるなら、W. D. バーナムや J. G. ラスクのように同一選挙年に執行された諸選挙における同一政党票の最大と最小との差が交叉票とい

第三表 総選挙における一貫票の実態（高松市）

		自民	%	社会	%	共産	%	執行日
I	A 1971年参院全国区	45,893	44.9	26,498	25.9	5,814	5.7	1971, 6.27
	B 1971年参院地方区	40,807	39.5	56,784	54.9	5,821	5.6	
	C 1972年総選挙	87,171	61.1	41,223	28.9	14,196	10.0	1972, 12.10
	D 最大○最小	46,364		30,286		8,382		
	D/A	1.01		1.14		1.44		
II	A 1977年参院全国区	49,488	34.5	29,308	20.4	9,118	6.4	1977, 7.10
	B 1977年参院地方区	64,964	43.8	77,275	52.1	5,986	4.0	
	C 1976年総選挙	90,466	57.3	36,683	23.2	14,263	9.0	1976, 12.5
	D 最大○最小	40,978		47,967		8,277		
	D/A	.83		1.64		.91		
III	A 1980年参院全国区	64,226		20,388	13.0	3,650	2.3	1980, 6.22
	B 1980年参院地方区	75,413		(無)45,554	28.9	11,361	7.2	
	C 1980年総選挙	106,462		45,509	28.3	8,908	5.5	1980, 6.22
	D 最大○最小	42,236		25,166		7,711		
	D/A	.66		1.23		2.11		

参考 調査標本（1980年）

	自民	%	社会	%
A	59	39.9	21	19.3
B	76	51.0	29	19.5
C	84	55.3	35	23.0
D	25		14	
D/A	.42		.67	

うことになる⁽²⁾。この方法に倣って、同一年ではないが衆参の選挙が近接した選挙間の党派別得票数の最大と最小との差、更にその差を全国区の票で除した値が第三表に示してある⁽³⁾。表によると、80年の D/A が最も低かったのが市

では自民であり、次に社会、共産の順となっている。仮に、当該開票区域の全国区の党派得票数をその政党の他選挙にも通じる基礎票と考えた場合、自民の一貫票率が最も高かったといえるわけである。自民は A, C が共に上昇するとともに、D がほぼ従来のままにとどまることが出来たのが一貫票率を上げた原因である。社会が D/A でその次に高いが、地方区で従来の方区並の得票をしていれば更に一貫票率が下がった筈である。一貫票率が最も低いのが共産で、77年と比べ地方区得票は倍増したものの全国区が1/3に減少したために非常に多い交叉票を生んだ。

公的な選挙結果と一貫票との関係は上の通りであるが、各級選挙の党派得票の中には別の選挙で他党に投じた票が混入しているため D がその党の交叉票の全てとはいえない。A にも勿論 B, C にも他党に投じた票が混入している。かかるネットによる相殺を防ぐには、A-B-C 各々の投票政党を直接投票者に聞く以外にはない。そこで今回調査における一貫票のタイプ別分類と党派別構成を第四表に示してある。表では、各タイプを、I-三選挙全てにおいて交

第四表 一貫票の各タイプと党派構成

		I	II	III	IV	V	棄
自民	%					78	
	n					(47)	
社会						17	
						(10)	
共産						5	
						(3)	
計						100	
						(60)	
全体	%	24	17	10	4	36	10
	n	(39)	(28)	(17)	(6)	(60)	(16)

又投票（完全交叉票と呼ぶ）、II-衆議院と参議院地方区のみ一貫、全国区では他党に逸脱（衆参地型一貫票と呼ぶ）、III-衆議院と参議院全国区のみ一貫、地方区で逸脱、IV-参議院地方区と全国区で一貫、衆議院で逸脱、V-三選挙全てに一貫（完全一貫票と呼ぶ）、更に少なくとも一つの選挙で棄権というように分けてある。本来ならば一貫票を党派別ないし保・革別に更に分割する⁽⁴⁾

のが望ましいが、自民以外の一貫票標本が少ないので今回は断念した。公明、民社は衆院と参院地方区に候補者をたてなかった⁽⁵⁾ので勿論一貫票は問題とにならない。しかし自社共以外の政党への全国区投票者を含め、標本では諸派・無所属も一党として分析の対象にしているので、地方区の社会推薦無所属候補、自民党員の無所属候補、全国区の諸派、無所属への交叉率が高くなり一貫票の割合が全体としては少ない。標本全体のなかで3割強を占める完全一貫票の党派別構成は、自民が圧倒的多数で次に社会、共産と続いている。全体の6割強が何らかの形での交叉票であるが、うち完全交叉票は24%、タイプIIは17%、タイプIIIは10%、そしてタイプIVは4%と分布している。地方区の社会推薦を無所属と答えた回答者、自民党員無所属投票者、全国区諸派、無所属投票者がこの中には相当数いると見られる。

三、世論調査資料にみる一貫票の実態

第五表「一貫票と各要因との相関」は、三選挙を通じて投ぜられた一貫票に影響を与えたと考えられる諸要因と一貫票との相関の有意差の度合を列挙したものである。諸要因は、調査表の中から、1. デモグラフィー、2. 党派性、3. 参加、4. その他に分類し選定したものであるが、参考までに経年変動票（ここ十年の投票政党変更）との相関も示しておく。以下、ほぼこの順序に従って説明を加えてゆくことにする（尚、以下の表中の χ^2 値は衆・参両院選挙の棄権者を除いた値であるが、クロス表中の%値はこれを含めたものである。文中「原資料」という場合、頁数の関係上掲載できなかつた関連する基礎的資料を指す）。

(i) デモグラフィックな要因と一貫票

第六表にデモグラフィックな要因と一貫票の各タイプとの詳細な相関が示しており、更に理解の便のために第一図～第七図にそれらをグラフ化したものが掲げてある。

性別で見ると、女性の方が男性より9%も完全交叉票（I）が多いという他は殆ど男女差はない。年齢別では、年齢が上るほど完全一貫票率（V）が高く、

第五表 一貫票と各要因との相関

要 因	衆・参三選挙一貫票との相関		ここ十年の投票政党変更との相関	
	相関の強さ	無相関	相関の強さ	無相関
(1) デモグラフィ-				
性		/		/
年 令		/	*	
学 歴	*			/
職 業		/	***	
労 組		/		/
所 得		/		/
居住年数		/	*	
(2) 党派性項目				
党 派 性		/	*****	
決 め 手 (衆)	} 略		} 略	
(参地)				
(参全)				
衆院選定基準 (1)	*		****	
(2)		/	**	
参院選定基準(地方区)			**	
(全国区)			**	
党か人か (衆)		/		/
(参地)	*			/
(参全)	*****			/
投票政党変更	**			
変更理由		/		
投票政党 (衆)	****			/
(参地)	*****			/
(参全)	*****		****	
(昨衆)	***		***	
政党支持	*****		*****	
拒否政党		/		/
拒否政党名	*****			/
解散評価		/		/
(3) 参加項目				
参加行動		/	*****	
参加態度		/	*	
選挙評価		/	*	
選挙の責任		/		/
投票棄権			****	

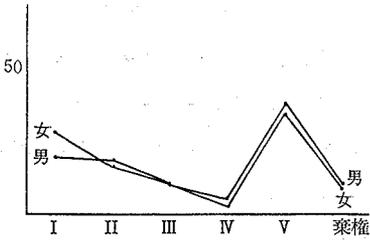
投票決定日 (衆)	***	***	
(参地)	*****	*****	
(参全)		**	
投票理由		*	
後援会加入		/	/
後援会加入数		/	
後援会費支払	**		/
後援会加入勧誘		/	/
演説出席	*	*****	
政党接触	*		/
機関紙購読		/	/
購読度	***	***	
献金意思	**		/
公選法遵守		/	/
啓発周知		/	*
同時選挙		/	**
不便理由	**		/
マスコミ接触	**		/
(4) その他			
生活態度		/	/
生活満足	*		/
政治満足	*****	*	

*~***** は危険性 .20 から .001 以下の順で有意差がある。

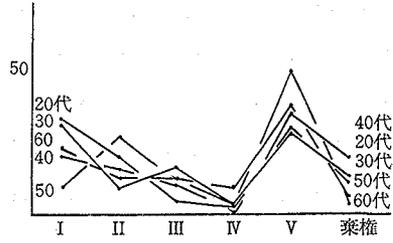
若いほど完全交叉票が多い。特に50代の壮年層に衆参地型一貫票率(27%)が高いことに注目すべきである。原資料によると、50代の社会党投票者が衆参地とも11名であるのに対し参全では50代同党票が4名に減少し、減少分が自社以外の三党と無所属に分散している。この点から、50代の衆参地型一貫票の高さは社会党票の全国区での逸脱によるところが大である。学歴別では中学歴層に完全一貫票率が低く高学歴層に衆参地型一貫票が少ない(原資料では高学歴層の中では、自・社が参地で減少し共産投票者が2名増えている)。職業別に完全一貫票率が高い順にいうと、管理—無職—主婦—自営—ブルーカラー—ホワイトカラーの順である。主婦、自営層は完全一貫票率が高いとともに完全交叉票率も高いというように両極化しており、他方ブルーカラーの完全交叉票率は低くホワイトカラーの方が高い。「労組加入」者の完全一貫票率は25%と低い、衆参地型一貫票が多い。原資料において、衆・参地の自民票(6~7票)

第六表 デモグラフィックな要因と一貫票

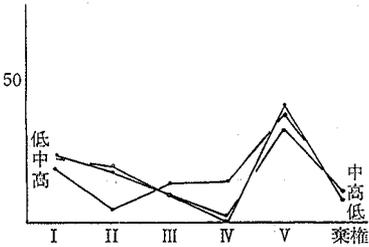
	I	II	III	IV	V	棄権	n	χ^2	df
性 別									
男	19	18	10	5	38	10	(79)		
女	28	16	10	2	35	9	(87)	2.38	4
年 令									
20~	31	9	16	3	28	13	(32)		
30~	33	20	4	2	30	11	(46)		
40~	20	15	10	—	35	20	(20)		
50~	9	27	12	9	38	6	(34)	17.82	16
60~	21	12	12	3	50	3	(34)		
学 歴									
低	24	18	10	—	41	8	(51)		
中	23	20	10	3	33	11	(91)		
高	19	5	14	14	38	10	(21)	11.60	8
職 業									
自営	27	19	5	5	38	5	(37)		
管理	14	—	14	14	57	—	(7)		
WC	27	13	10	7	30	13	(30)		
BC	16	19	19	3	31	13	(32)		
主婦	26	16	7	—	40	12	(43)		
無職	21	21	14	—	43	—	(14)	22.44	32
労 組									
加 入	25	30	5	15	25	—	(20)		
非 加 入	21	14	17	3	31	14	(29)		
労組なし	19	5	19	—	38	19	(21)	10.30	8
所 得									
~10万	30	15	15	5	20	15	(20)		
~20万	14	14	19	5	38	10	(42)		
20万~	24	2	4	8	36	8	(25)	18.77	20
居 住 年 数									
~ 3年	25	25	25	—	25	—	(4)		
3年~	31	19	13	9	19	9	(32)		
10年~	32	21	5	11	32	—	(19)		
20年~	20	15	10	1	42	12	(111)	15.33	12



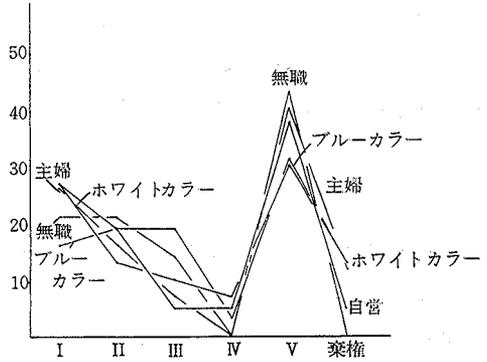
第一図 性



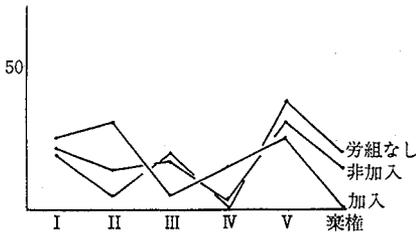
第二図 年令



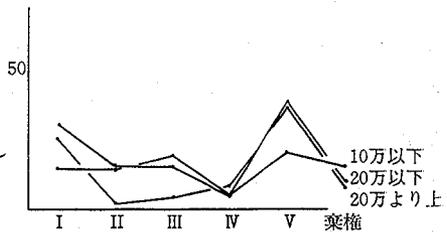
第三図 学歴



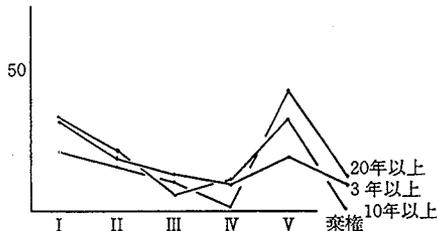
第四図 職業



第五図 労組加入



第六図 所得



第七図 居住年数

が全国区で一票に減少しているのがその原因である（全国区での社会票増加はない）。裏からいえば、労組員の衆・参地での自民票への逸脱があるということであり、労組という二次集団は標本でみる限り一貫票増幅効果をもたない。「非加入」から「労組なし」の順に更に一貫票が増加しているが、労組の推薦という圧力が弱まるにつれ行動の逸脱現象が少なくなるということを示す。所得別では低所得層に一貫票率が最も低い。居住年数別では、長い者に一貫票が多いという正の相関がある。

以上マトめると、完全交叉票は女性・若年層・中学歴層・ホワイトカラー・労組加入者・低所得層・短期市在住者に多く、完全一貫票は男性・壮年・低学歴・管理・無職層・労組非加入（なし）者・長期市在住者に多いといえる。

(ii) 党派性と一貫票

前掲第五表の「2. 党派性項目」から有意性の高いものから順に、①「党か人か」（参全）、②「投票政党」（参地、全）、③「政党支持」、次に高いグループが「拒否政党名」、次に「投票政党」（衆）、次に「昨年衆院投票政党」、次に⑤「投票政党変更」、最後に④「衆院選定基準（1）」、「党か人か」（参地）となっている。論述の順序は①～⑤とし各関連項目マトめて行なう。その前に、党派性の強さと関係があると考えられる項目を調査表の中から抽出し個人別に得点化しその得点の分布を低い者から順に4分類した「党派性の強さ」という変数⁽⁶⁾と一貫票変数とをクロスさせた第七表をみてる。表によると、党派性が高ければ高いほど完全一貫票率が高くなるという正の関係が見出せる。即ち、党派的態度の強さは選挙の種類の違いを超えて同一政党に投票する確率を高め

第七表 党派性の強さ

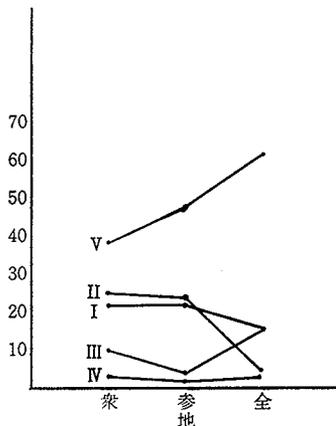
		I	II	III	IV	V	棄権	n	x^2	df
党派性の強さ									7.38	12
	1	29	16	11	5	21	18	(38)		
	2	21	12	9	5	33	21	(43)		
	3	26	24	11	3	37	—	(38)		
	4	19	17	11	2	51	—	(47)		

ることが予想される。以上党派性に関連する各項目の殆どは各級選挙に同じ質問が三度繰り返されたものである。表の見方としては、ひとつの選挙であるカテゴリーに対する一貫票反応が他の選挙での反応より高ければ前者の決定が一貫票決定に寄与するというようにみてゆくことにする。

①「党か人か」 今まで交叉票とは選挙毎に異なる政党の候補者に投票する行動であるとして扱って来たが、政党への考慮と関係なく候補者中心に選択する行動が結果的に彼らの投票政党を異ならせるということもありうる。第八表、八図によると、各級選挙で「人」を重視して投票した者の大きい割合が他の選

第八表 党か人か

	I	II	III	IV	V	衆権	n	x^2	df
党か人か									
党									
衆	22	25	10	3	39	1	(69)		
地	22	24	4	2	48	—	(54)		
全	16	5	15	3	61	—	(62)		
人									
衆	27	14	13	4	41	1	(71)		
地	24	18	15	5	37	—	(78)		
全	33	28	9	3	27	—	(67)		
						衆	2.78		4
						参地	6.58		4
						全	23.72		4



第八図 党選択者（党か人か）

挙で異なる政党の候補者に投票している事実がこの例となる。とりわけ全国区では「党」を選択した者の6割「人」選択者の3割弱が完全一貫票であり、選挙区が小さくなるほど「党か人か」の一貫票説明力が弱くなる。全国区は「政党国家的民主制」と「自由主義的・代表議会制的民主制」⁽⁷⁾との相克点となっていることを物語っている。しかも全国区「人」選択者の約3割が衆参地型一貫票であり、このことは全国区でのみ党派的拘束から解放されて人物本位の選択をする者が多く存在するということを示している。候補者が党や大組織に依存して選挙運動を行なわざるを得ないということと、有権者が彼らを判断する基準とは同じものではないということに注目すべきであろう。

②「投票政党」ある選挙の投票政党の中に他二選挙にも同一政党に投票した者が含まれる割合をみるのが第九表における投票政党と一貫票とのクロスである。その相関によって、第一に三選挙を通して一つの政党に投票を一貫させる政党の票系列化能力、第二に三つの選挙の性格各々に即応して他党票を吸引できる能力の二点を明らかにすることができる。第九図には標本中の各級選

第九表 投票政党

投票政党*		I	II	III	IV	V	棄権	n
自 民	衆	11	20	10	2	56	1	(84)
	参地	5	22	8	3	62	—	(76)
	参全	3	2	14	2	80	—	(59)
社 会	衆	11	31	20	6	29	3	(35)
	参地	17	35	10	3	35	—	(29)
	参全	—	10	33	10	48	—	(21)
共 産	衆	25	—	—	—	75	—	(4)
	参地	25	—	13	25	38	—	(8)
	参全	17	—	—	33	50	—	(6)
諸派・無所属	衆	—	—	—	—	—	—	—
	参地	29	14	57	—	—	—	(7)
	参全	32	68	—	—	—	—	(19)
n		(39)	(28)	(17)	(6)	(60)	(16)	

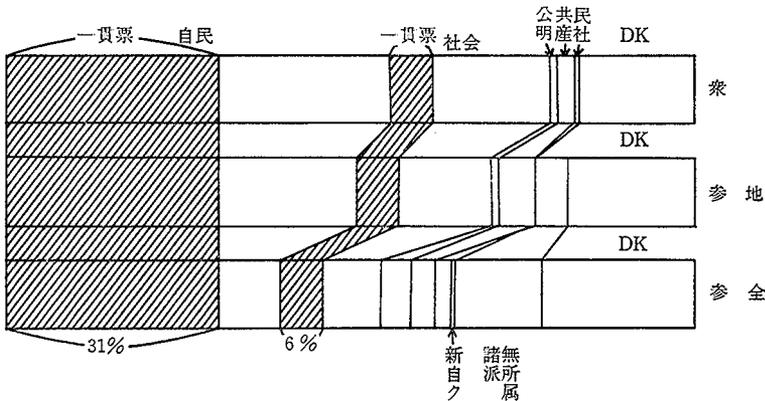
* 公明・民社については少数のため略。

	χ^2	df
衆	31.53	16
参地	46.79	16
参全	117.67	

挙における政党の得票率とともに自民・社会の一貫票率（各31%，6%）を掲げているので合わせて参照されたい。

ところで、一選挙での投票政党中完全一貫票の割合が高いほどその選挙が党派になるという意味でその政党にとっての党派型選挙と呼び、一貫票率が低い選挙を無党派型選挙と呼ぶことにする。そうすると、自民は全国区が党派型で参地、衆院となるにつれて無党派型となり、社会もほぼこの順に無党派型に近づくが全体として無党派型である。標本が少ないけれども、衆院が党派型、全国区が無党派型となる共産は自社両党とは対照的パターンをもっている。もし全ての政党が全ての選挙で完全一貫票のみで構成される党派型得票構造を示すとするなら、第一に民主的選挙における自由な討論・説得活動が意味をもたなくなるという点で、第二に広く他党の票を自党に誘引するという国民政党としての統合能力の有無という観点で、好ましくない。

このことは各政党の選挙戦術にとっても重要である。選挙の勝利は総投票のどれだけ多くを自党に組織するか、自党総得票のうちどれだけ多くを他選挙他党票で構成するかということに係ってくるからである。第九図にみられるように、自民はこの両者の点で衆院・参院地方区で成功し全国区で失敗している。香川県全体からみると自民得票率の衆院と全国区との差が25.8%もあり、大都市を擁する都道府県の傾向（東京0.4%，大阪0.2%）と対照的である。「準農



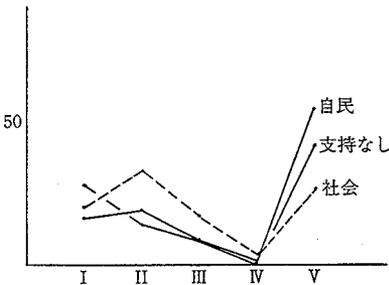
第九図 投票政党

村県」⁽⁸⁾ともいえる香川では、同日選挙のいわゆる「相乗効果」は全国区までは及び得ていないことを示すものである。

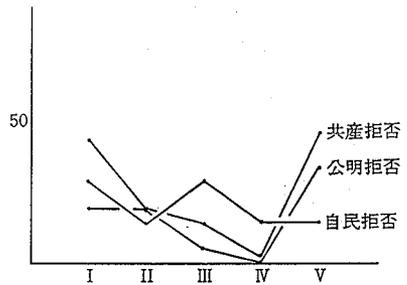
③「政党支持」と「拒否政党名」 第十表、十、十一図でみるように、「政党支持」と「拒否政党名」とが非常に高い相関を示している。政党支持別でみると、共産を除いて完全一貫票率第一位が自民（半数が完全一貫、次いで衆参地型一貫）、第二位支持なし（4割弱が完全一貫）、そして第三位社会（2割のみ

第十表 政党支持と拒否政党名

	I	II	III	IV	V	棄権	n	χ^2	df
政党支持								109.40	24
自民	15	17	7	1	51	9	(69)		
社会	18	29	15	3	24	12	(34)		
公明	—	—	50	50	—	—	(2)		
共産	—	—	—	33	67	—	(3)		
民社	—	33	—	67	—	—	(3)		
支持なし	24	12	14	—	36	14	(42)		
拒否政党								0.57	4
ある	25	17	12	4	37	5	(94)		
ない	20	16	8	3	38	15	(61)		
拒否政党名								38.99	16
自民	29	14	29	14	14	—	(7)		
社会	—	—	—	—	100	—	(1)		
公明	41	18	5	—	32	5	(22)		
共産	18	18	13	2	43	7	(56)		
新自ク	—	—	—	100	—	—	(1)		



第十図 政党支持



第十一図 拒否政党名

が完全一貫、次いで3割の衆参地型一貫)の順となる。第十図からも分るように自民・社会・支持なしとも一貫票の組み合わせは殆ど変りないが、完全一貫票に注目すると同日選挙の効果は明確にその跡をとどめている。「首相の死」という自民寄りの刺激が自民支持層の一貫票率を第一位とし社会を最下位に引き下げたという点、更に、最も一貫票率が低いと考えられる支持なし層の票を揃えたという点がそれである。支持なし層の最も無関心な層については、三選挙同時執行という事態に直面し便宜的選択基準に一定の党名を採用したという点でまず投票が揃い、その三票も三選挙の全体状況自体が一党派に偏倚する刺激を持っていたため自民寄りとなったと判断できる(第十一表参照)。

第十一表 政党支持と投票との関係

	衆 自	院 革	DK	参 自	院 革	地 DK	参 自	院 革	全 無所属	DK
自 民	87	2	11	79	6	14	65	10	8	18
革 新	13	79	8	27	65	8	5	63	18	13
無 党 派	65	27	8	44	47	8	46	20	20	14

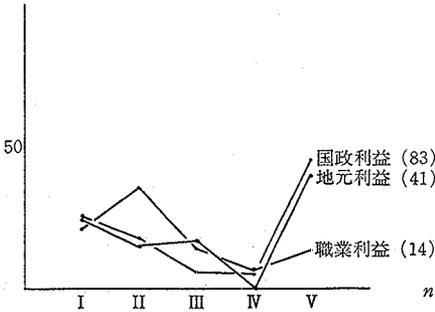
拒否政党別の完全一貫票率では、社会を除いて共産拒否層が第一位の完全一貫票、公明拒否層が第二位の一貫票率を示し、自民、社会は拒否されることが少ない。共産拒否は一貫投票者の反共的性格を示している。公明拒否者中完全交叉票4割という高率を示していることから考えると、公明拒否一組織政党拒否一交叉票という仮設も成立しそうである。

④「選定基準」 衆参の選定基準は、調査表では衆院と参院で質問内容が異なるので同時に分析するのは問題がある(参院では投票理由を聞いている)けれども、各級選挙の候補者に対する有権者の代表観を表わすものである。これらと一貫投票行動との相関は各級選挙の代表観の組み合わせに貫流する何物かを物語るはずである。その観点から各級選挙で完全一貫票を生む代表観を第十二表から取り上げてみると、衆院<地元・国政>一参地<政党・政策・地元>一参全<勤労者・団体組合・政党>の組み合わせとなり、完全交叉票は衆院<職業>一参地<勤労者・生活・団体組合>一参全<地元・政策・政治改革・親しみ>の組となる(少数のものは捨わず)。両者の組からみて、一貫票の源泉

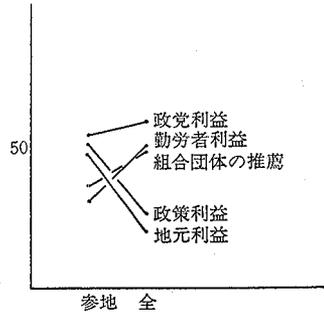
第十二表 選 定 基 準

	I	II	III	IV	V	棄権	n	χ^2	df
衆院選定基準								11.60	8
1 {	地元利益	24	15	17	—	42	2 (41)		
	職業利益	21	36	14	7	14	7 (14)		
	国政利益	25	18	6	5	46	— (83)		
衆院選定基準								18.81	16
2 {	手腕	11	16	18	2	51	2 (45)		
	識見	23	23	7	3	45	— (31)		
	清潔	30	22	11	8	27	3 (37)		
	知名度	57	—	14	—	29	— (7)		
	地元	17	28	11	—	44	— (18)		
参院選定基準								参地 30.16	32
								参全 38.28	32
地元利益 地	20	20	13	—	47	(15)			
全	20	20	40	—	20	(5)			
職業利益 地	—	33	33	—	33	(3)			
全	—	60	20	—	20	(5)			
勤労者利益地	19	25	13	13	31	(16)			
全	13	19	13	6	50	(16)			
生活利益 地	—	—	67	—	33	(3)			
全	20	40	—	—	40	(5)			
政策利益 地	31	—	13	6	50	(16)			
全	26	26	11	11	26	(19)			
団体組合 地	9	23	9	18	36	(11)			
の推薦 全	24	5	14	10	48	(21)			
政党代表 地	23	19	4	—	54	(26)			
全	16	16	11	—	58	(19)			
政治改革 地	22	26	9	4	39	(23)			
全	30	22	13	—	35	(23)			
親しみ 地	40	20	20	—	20	(5)			
全	70	—	—	—	30	(10)			

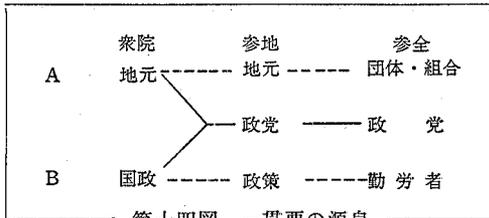
となる代表観はほぼ第十四図のように構成されているのではなからうか。図では地域代表観と国民代表観とが原理的には矛盾してはいてもいずれも一貫票の源泉となり、参地もほぼ同系統の分岐形を示し、参全ではいずれも組織依存型の票系列化活動に属するとはいえ、有権者にとって「団体・組合の推薦」が外発的で「勤労者の利益」代表が内発的であるという意味で両者は矛盾している



第十二図 衆院選定基準 (1)

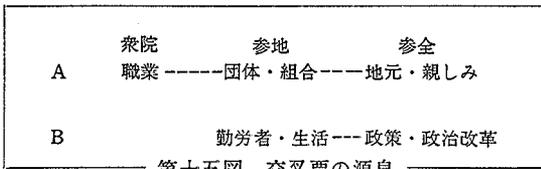


第十三図 参院投票理由 (完全一貫票率)



第十四図 一貫票の源泉

—A, B 間矛盾。そして A, B 間矛盾が「政党」要因によって統合されているのである。A, B 間矛盾の系統について付言しておく、両者は A. キャンベルの言う「無関心な一貫票」と「動機のある一貫票」の区別⁽⁹⁾ とほぼ同じものといえるだろう。他方、交叉票の源泉となる代表観を同じように第十五図に図式化してまず気付くことは参地・全とも質問項目が同じであるにもかかわらず



第十五図 交叉票の源泉

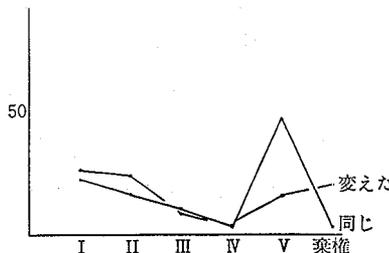
一貫票の源泉における「政党」のように両選挙に共通して登場する項目がないことである。にもかかわらず、第十四図と同様に A, B の矛盾する二系統に分けることができる。再びキャンベルに従って⁽¹⁰⁾ いうと、A 系統の交叉投票者の基礎的動機は「ある特定の候補者を拾い上げるための政党一貫投票を無視するように導びく特定の地方的候補者への一定の皮層な関心、友人の依頼または

土壇場の影響力によって投票所に赴く」という「無関心交叉票」を生む要因である。B系統は「一方の党の候補者または政策を好むが他党への忠誠心も感じている」という「政治的動機の葛藤」状態にあり「葛藤解決」のために「交叉票」を生むという要因である。

⑤「ここ十年間の投票政党変更」 第十三表、十六図は衆院選でここ十年間の投票政党を変更した者しない者の一貫票率を示したもので、いうまでもなく時系列上の一貫票と同日選挙のそれとの性格の異同を物語っている。第十六図から分かるように、完全交叉票から各級選挙の組の一貫票における違いは殆どないものの、完全一貫票で30%の差、棄権で17%の差を生んでいる。即ち、日頃選挙で投票政党を変更するいわゆる「浮動投票者」は同日選挙においても各級選挙でこれを変更しやすいか棄権する。標本が更に細分化されるが、「変更理由」をみると、自党候補者の有無による変更者（「候補者（党）」）衆参地一

第十三表 投票政党変更

	I	II	III	IV	V	棄権	n	χ^2	df
投票政党変更								8.46	4
同じ	22	16	10	3	47	3	(101)		
変えた	26	24	9	4	17	20	(46)		
変更理由								18.90	16
政党不満	33	17	17	—	17	17	(6)		
他党選好	40	20	—	7	27	7	(15)		
思想変化	—	17	33	—	17	33	(6)		
生活変化	—	40	—	—	20	40	(5)		
候補者(党)	25	38	—	13	—	25	(8)		



第十六図 投票政党変更

貫・全国区逸脱型になる。衆参地では党派的考慮外で行動し全国区では自党候補者がいるため党派的に行動するからである。外発的圧力に弱い「生活変化」型の変更者は地方的に票を揃えるか棄権し、内発的「思想変化」者が衆参全一貫型を示す。注目すべきは今まで支持して来た「政党不満」者が6名中4名の交叉票を投じ「他党選好」者の一貫票が若干上回っているという点である。このことは、投票決定時点で従来の支持政党に対してネガの方向に態度が向いているときは一貫票を生まないのに対し、ポジへと態度が決定した状態にある者は例え過去の変更者であっても一貫票へ傾斜するという点を物語っている。

⑥ その他の党派性項目 一応党派的方向をもつと思われる残りの項目を最後に掲げておこう。「決め手」となった圧力をみると、一次集団の影響の方が二次集団のそれよりも一貫票を生むのに大きな役割を果たしていることがわかる。「家族と相談」は衆・参全で完全一貫票を生むのに大きな役割を果たす(53%)が、参地において家族と相談した者は衆参地を一貫させただけ(25%)である。全国区まで一貫させるのには「知人のすすめ」の役割が大きい(24%の衆参全一貫型、48%の完全一貫票)。二次集団は一貫票に余り影響しない。「組合・団体」のすすめの影響が弱い点にこれがみられる。二次集団の場合、各級の選挙で機能する組織が交叉していたり、または選挙毎に組織活動の活発不活発のバラつきがあるのではなかろうか(行の度数をみよ)。最後に、衆院の「解散評価」については、「賛成」「しかたない」とする者に対して「反対」者の完全一貫票率が高い。

(iii) 参加と一貫票

各要因の検討に入る前に、参加に関連する総合的態度と一貫票との関係をみることによって概略を把握しておく。第十五表、十七図は、後援会加入、加入数、会費支払い、演説会出席、政党接触、機関紙購読、購読度、献金意思、マスコミ接触等日常的参加項目を取り上げ得点化した「参加態度」という変数を作成し一貫票との関連を示したものである。一見両者の相関は低いようであるが、完全一貫票(V)の列をみると<低>で一貫票率が低く<中下>が高く<中上>が低く<高>で低いというパターンがあることが分かる。即ち日常的

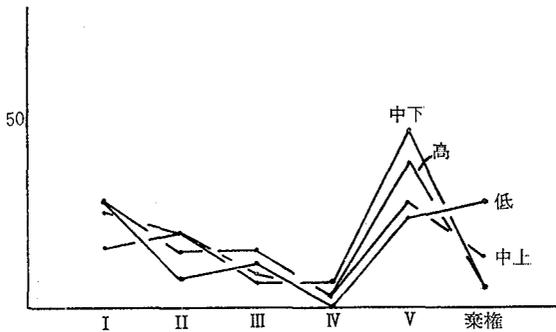
第十四表 決 め 手

		I	II	III	IV	V	棄権	n	x^2	df
決め手	衆	16	21	11	—	53	—	(19)		
	家族と	19	25	13	6	38	—	(16)		
	相談	24	18	6	—	53	—	(17)		
知人の	衆	17	33	8	—	42	—	(12)		
	参地	27	13	13	7	40	—	(15)		
	参全	10	14	24	5	48	—	(21)		
演 説	衆	17	50	—	—	33	—	(6)		
	参地	17	25	17	8	33	—	(12)		
	参全	—	33	—	—	67	—	(3)		
組合・	衆	31	23	8	8	31	—	(13)		
	参地	31	23	15	8	23	—	(13)		
	参全	14	23	18	9	36	—	(22)		
選挙公	衆	28	13	13	6	41	—	(32)		
	参地	25	18	11	—	46	—	(28)		
	参全	33	7	13	—	47	—	(15)		
ピラ・	衆	—	—	100	—	—	—	(1)		
	参地	—	100	—	—	—	—	(1)		
	参全	—	—	100	—	—	—	(2)		
候補者	衆	67	—	—	—	33	—	(3)		
	参地	100	—	—	—	—	—	(3)		
	参全	50	—	—	—	50	—	(2)		
政 党	衆	25	17	13	4	38	4	(24)		
	参地	30	9	4	4	52	—	(23)		
	参全	24	12	6	6	53	—	(17)		
人 物	衆	21	26	5	5	42	—	(19)		
	参地	14	14	7	—	64	—	(14)		
	参全	38	25	4	—	33	—	(24)		
世 評	衆	—	—	20	20	60	—	(5)		
	参地	—	—	—	50	50	—	(2)		
	参全	—	—	—	50	50	—	(2)		
新 聞	衆	50	—	—	—	25	25	(4)		
	参地	60	20	20	—	—	—	(5)		
	参全	60	20	—	—	20	—	(5)		

衆	50	—	—	—	50	—	(6)	
テレビ 参地	—	33	—	—	67	—	(3)	
参全	14	43	—	14	29	—	(7)	
							衆 37.17	44
							参地 43.51	44
							参全 57.42	44
解散評価							7.71	8
賛成	24	15	15	—	35	12	(34)	
しかたない	21	26	10	7	33	3	(58)	
反対	21	12	12	2	47	7	(43)	

第十五表 参加態度

	I	II	III	IV	V	棄権	n	χ^2	df
参加態度								9.81	12
低	28	8	12	—	24	28	(25)		
中下	16	20	7	7	47	4	(45)		
中上	28	15	15	3	28	13	(40)		
高	25	20	9	4	39	4	(56)		



第十七図 参加態度

参加の態度が強いということと一貫票率が高いということは必ずしも有意の関係にはない。しかしある程度低いと一貫票を生み、更に低いと交叉票を生み、逆に極端に高いと一貫票を生み、中位に高いと交叉票となる。態度の高低の両レベルに一貫・交叉の両行動が共存していると言った方がよいであろう。もっと言えば、参加態度が強い場合、活動家（党派）的政治参加と無党派的政治参加の両形態がありうる。弱い場合、党派的政治対象に選択的に関与する結果参

加量が減る場合と、そもそも政治的無関心派で専ら外的圧力に交叉される場合との両者が考えられる。その結果参加と一貫票との相関が不規則になるのである。

ところで、前掲第五表（3）の参加項目の中から有意の関連が強い順に挙げると、「投票意思決定日」（参地、衆）、「機関紙購読度」、「後援会費支払」・「献金意思」・「不便理由」・「マスコミ接触」、そして「演説出席」・「政党接触」である。叙述の順序は、直接投票行動に関係のある意思決定日をまず取りあげ、次に党派性を含むとみられる参加要因を扱い、次に情報量と一貫票との関係を見、最後に政治不満に触れる。

①「投票意思決定日」三選挙各々につき「投票意思決定日」を「遅」「中」「早」の三レベルに分けて一貫票との関連をみたのが第十六表である。全体として衆・参地の決定日が早く候補者の多い全国区が遅くなる傾向がある。早い者ほど完全一貫票率が5割前後と極めて高く遅い者ほど低い。特に遅いグループに着目すると、参地で遅い者に完全交叉票が最も多く、次に衆参地型一貫票が28%にのぼり、他方参全で遅い者のこの型の一貫票は少ない。参地で決定が遅れたのは衆院と参院地方区との投票政党を一致させようとする周囲からの圧力の結果であり、全国区にはこの圧力は及び得ていなかったことを表わしてい

第十六表 投票意思決定日

		I	II	III	IV	V	n	x^2	df*
遅い	衆	29	26	11	8	26	(38)	衆 33.51	20
	参地	33	28	13	10	15	(39)	参地 40.45	20
	参全	29	20	13	4	35	(55)	参全 11.84	20
中	衆	23	18	12	4	44	(84)		
	参地	22	15	10	1	52	(79)		
	参全	23	17	10	4	45	(69)		
早	衆	24	12	12	—	52	(25)		
	参地	22	19	7	4	48	(27)		
	参全	15	15	15	5	50	(20)		

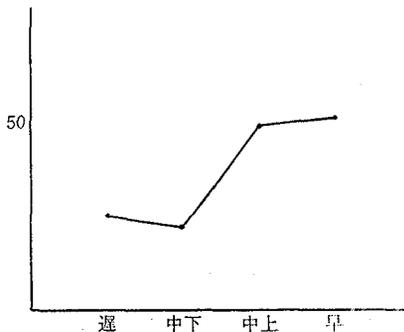
*遅 中 早の三分割ではなく、6分割の自由度

る。先に触れたように高松市の「相乗効果」は衆院・参院地方区のレベルまでである。

第十六表を更に整理する目的で三選挙全体を通して意思決定の早遅を得点化した「参加行動」なる変数と一貫票との関連を第十七表、十八図に掲げておく。両図表においても得点の高い者ほど完全一貫投票者であることが示されてはいるが、意思決定行動と参加の態度との関係について若干の留保条件をつけておく必要がある。というのは参加の態度が強いということと意思決定が早いということとは必ずしも同じことではないからである。選挙に無関心であることが投票所決定者を多くするというと同時に、態度が強ければそれだけヨリ多くの選挙情報に接触して判断材料が増え意思決定が遅れるということが往々にしてある⁽¹¹⁾。第十八図における<中下>から<遅>に完全一貫票率の減少がみられないのは恐らくこれと関係があるだろう。<中上><早>グループには同じように強い党派の参加者と弱いその両形態が含まれるであろう。この点

第十七表 参加行動

	I	II	III	IV	V	棄権	n	χ^2	df
参加行動								14.70	12
遅	30	20	15	10	25	—	(20)		
中下	39	25	11	3	22	—	(36)		
中上	19	19	9	4	49	—	(47)		
早	21	13	13	2	51	—	(47)		



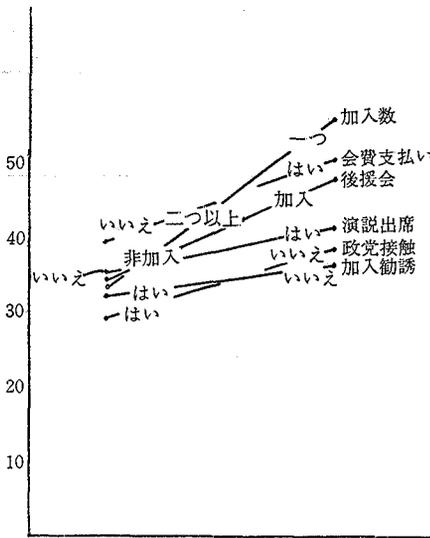
第十八図 参加行動 (完全一貫票率)

を再検討するために、次に参加項目の中から党派的方向を持つ行動を特にとりあげて分析してみる。

②党派的方向を含蓄する参加行動 ここで扱う要因はいずれも参加に関係しているが、それへの関与は党派的方向を持つとともに消極—積極という参加の強さとも関係しているという意味で一括して取り上げ得る。第十八表、十九図がこれらの要因と一貫票との相関である。仮定としては、これらの対象への関与の程度が高ければ高い程一貫票を生むということである。「後援会加入数」、「加入勧誘」、「政党接触」を除いてこの仮定は正しい。後援会加入数二つ以上の者は交叉票を生む確率が高いであろう。いかなる政党も個人（党）後援会組織を設けるようになった現在、加入数が多ければ多いほど互いの組織が政党を交叉する可能性が高くなる訳で、これが一貫票率を低めるのである。非加入者のうち、加入の「勧誘」を受けた者に完全一貫票率が低いのは、勧誘を受け断ったということが組織ぎらい、政治的無関心、無党派主義などの立場に基づ

第十八表 党派の参加要因

	I	II	III	IV	V	棄権	n	χ^2	df
後援会								3.29	4
加入	22	16	6	—	47	9	(32)		
非加入	24	17	11	5	34	10	(132)		
加入数								3.11	3
一つ	20	10	10	—	55	5	(20)		
二つ以上	25	25	—	—	33	17	(12)		
会費支払								6.75	3
はい	8	33	—	—	50	8	(12)		
いいえ	33	6	11	—	39	11	(18)		
加入勧誘								1.76	4
はい	22	18	14	6	32	10	(73)		
いいえ	26	16	8	3	36	10	(61)		
演説出席								6.62	4
はい	15	26	15	—	41	3	(39)		
いいえ	26	14	9	5	35	12	(127)		
政党接触								6.12	4
はい	7	36	7	7	29	14	(14)		
いいえ	25	15	11	3	37	9	(152)		



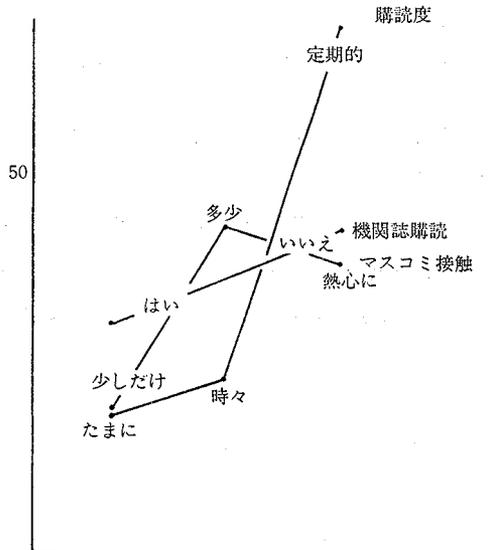
第十九図 党派的参加（完全一貫票率）

くものでいずれも交叉票を生む確率の高い立場だからである。受けない者は、後援会運動が包括し得ていないグループである。日常の党や議員の「演説出席」では肯定者に完全一貫票率が高いとともに、衆参地型一貫票を多く示している。「政党接触」でも完全一貫票率は低いものの衆参地型一貫票が多い点も上と同じ傾向であろう。演説出席や依頼の行為は参加でも積極性の高い部類に属するといわれる⁽¹²⁾が、この標本では地域性の強いものであることも示されている。

政党の出す新聞を日頃読んでいるかどうか（「機関紙購読」）も党派的方向をもつ参加行動である。しかし読むか読まないかはむしろ逆の完全一貫票率を示している（「はい」30%、「いいえ」42%）。そこで読む程度を聞いた項目（「購読度」）をみると、「定期的」購読者に高い完全一貫票率が集中している。このように一貫票は党派的方向と量の二要因に強い関係があることが分るが、もし方向が欠落したなら一貫票行動はどうなるであろうか。新聞・テレビ・ラジオなどマスコミ情報がこれにあたる。今回の選挙では「首相の死」をめぐる自民寄りの偏りを持っていたとはいえ、一般にマスコミ情報は多方向的である。そ

第十九表 情報との接触

	I	II	III	IV	V	棄権	n	χ^2	df
機関誌購読								5.53	4
はい	30	18	9	3	30	9	(76)		
いいえ	17	15	11	5	42	10	(88)		
購読度								15.86	8
定期	13	13	—	6	69	—	(16)		
時々	31	23	15	—	23	8	(26)		
たまに	38	18	9	3	18	15	(34)		
マスコミ接触								18.60	12
熱心に	24	14	21	—	38	3	(29)		
多少	19	20	8	4	43	6	(90)		
少ししかない	38	11	11	5	19	16	(37)		
全くない	—	25	—	—	38	38	(8)		



第二十図 情報との接触 (完全一貫票率)

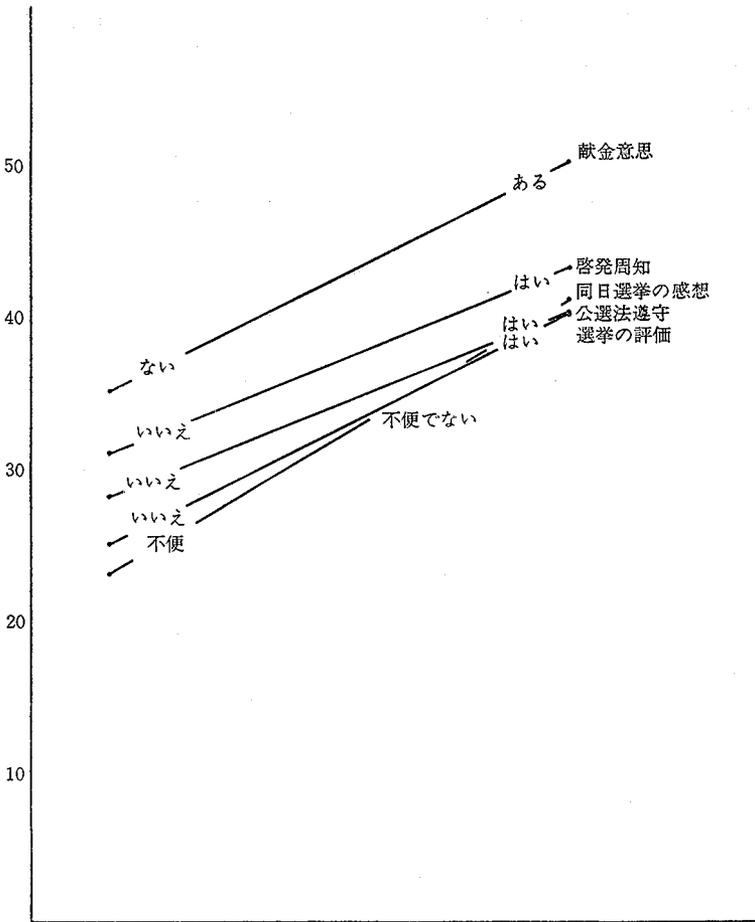
のため情報接触の量は必ずしも単調な相関を持たないことが予想される。第二十図が示すように「マスコミ接触」量と完全一貫票率は逆U字形をみせている。「少ししか」接触しなかった者には無関心型の交叉票が多いと思われる。マスコミに「熱心に」接触すると多方向的に判断材料が増えこれも交叉票に帰結す

る。「多少」の接触は、自分の選好に応じそれを強化するような接触行為であるから完全一貫票が多くなるのである。

③参加の態度と政治不満 ここでは日常的な参加行動としては直接には測定できないが、参加に関連する意見、態度、認知を一括して取り上げる。これらの中で間接的に党派の方向と関係があるのは、企業・組合の献金が廃止された

第二十表 参加の態度

	I	II	III	IV	V	棄権	n	χ^2	df
献金意思								8.58	4
ある	8	8	17	8	50	8	(24)		
ない	25	17	10	2	35	12	(121)		
公選法遵守								3.99	4
はい	25	16	10	1	40	8	(80)		
いいえ	21	19	11	6	28	15	(47)		
啓発周知								3.40	4
はい	21	16	9	5	43	7	(82)		
いいえ	27	14	13	3	31	12	(77)		
同時選挙								5.07	4
不便	32	18	11	5	23	11	(44)		
不便でない	21	16	10	3	41	9	(122)		
不便理由								24.13	16
運動の混乱	29	14	14	14	14	14	(7)		
テレビ面白くない	100	—	—	—	—	—	(1)		
選挙の混乱	44	17	17	—	11	11	(18)		
投票 "	—	44	11	11	22	11	(9)		
面倒	17	—	—	—	83	—	(6)		
明るい選挙								3.33	4
はい	21	19	11	3	40	6	(63)		
いいえ	29	16	14	2	25	14	(63)		
選挙の責任								20.02	16
選挙民	25	25	13	—	25	13	(8)		
候補者	7	27	7	7	33	20	(15)		
政党	18	27	36	—	9	9	(11)		
制度	38	—	—	—	38	25	(8)		
運動方針	40	5	15	—	30	10	(20)		



第二十一図 参加の態度 (完全一貫票率)

ら個人献金をする意思があるかどうかという「献金意思」である。この設問は、政党を個人の意思を基礎として組織するかどうかを測る一指標であるとともに支持する政党に対する参加の積極性を計る尺度でもある。献金意思がある者の約半数が一貫票を投じているという事実は注目してよいだろう。しかし意思のない者を政党政治に対して消極的立場があると批判するのは当を得ていない。確かに彼らの中にはこれらの無関心層が含まれているのは事実であるが、同時に既存の政党に不満を持ち政党システムから疎外された層も含まれるからであ

る。その関係で、今度は明るく正しい選挙が行なわれたかどうかを聞いた「選挙の評価」と選挙区に金品が贈られたかどうかを聞いた「公選法遵守」の項目をみると否定的評価を与えた者に完全一貫票率が著しく低い。これらの評価を与えた人は選挙の状況に対する高い認知を持つと同時に政党（治）に不信感を持つ人々である。第二十表から、選挙に否定的評価を与えたもののうち選挙を明るく正しいものにしなかった「責任」者を見ると、「政党」、「候補者」（「いいえ」中計41%）を槍玉に挙げた者が多いということが上の事を証明している。第二十一表は、「政治不満」と「選挙の評価」・「公選法遵守」とが強い関係にあることを示す参考表である。

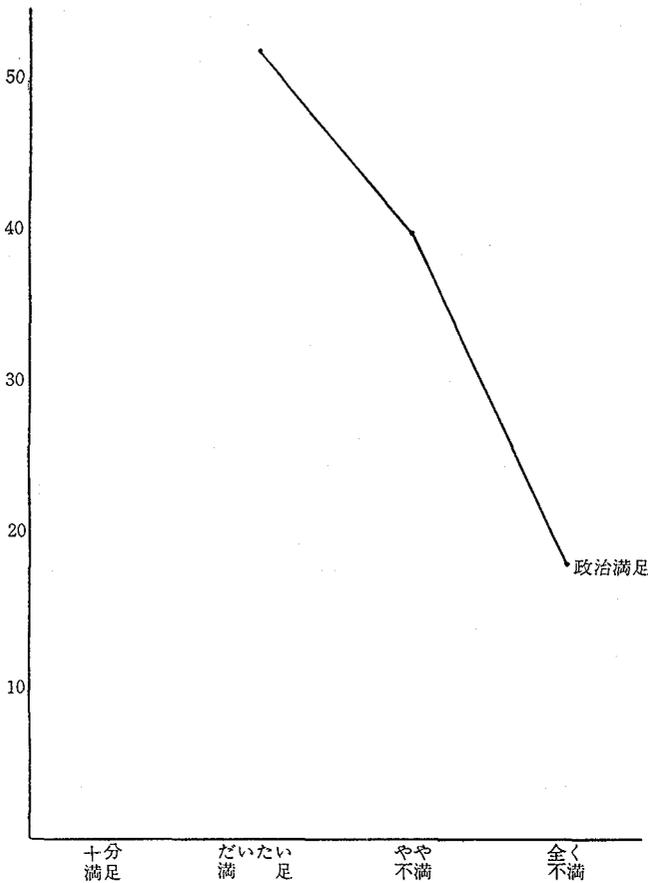
第二十一表 選挙の評価と公選法遵守

政治不満	選挙の評価				公選法遵守			
	はい	いいえ	一概に いえぬ	DK	はい	いいえ	DK	
十分満足	100	—	—	—	(2)	100	—	—
だいたい //	62	24	3	10	(29)	66	21	14
やや不満	34	37	20	9	(93)	46	28	26
全く //	18	64	14	4	(28)	29	46	25
DK	43	29	7	21	(14)	57	14	29

政治家・政党不信が交叉票に関係があることが分ったところで、第二十二表、二十二図に「政治満足」を直接に取り上げて一貫票との関係をみてみた。図表によると政治不満が強ければ強いほど完全一貫票率が2割を切るほど著るしく低下するということが示されている。「全く不満」層は参加から撤退（18%の棄権）するか、完全交叉票または衆参全型一貫票（いずれも21%）というようにアノマラスな行動が認められる。

第二十二表 政治満足

	I	II	III	IV	V	棄権	n	χ^2	df
政治満足								39.01	12
十分	—	—	100	—	—	—	(2)		
だいたい	7	14	21	—	52	7	(29)		
やや不満	26	22	2	4	40	7	(93)		
全く	21	14	21	7	18	18	(28)		



第二十二図 政治満足（完全一貫票率）

再び第二十表，二十一図に戻って，選挙の「啓発活動周知」と「同時選挙」が不便であったか否かを問う質問についてみる。この要因は投票のルールに対する認知，選挙啓発運動への自覚を表わしている。図表によると，啓発運動を知る者に完全一貫票が多い，同時選挙に不便を感じなかった者に完全一貫票が多いということが表われている。つまり認知量と党派的投票には相関がある。しかし，同時選挙を不便と感じた者の中実に8割弱が棄権もしくはタイプI~IVの交叉票行動を示したということは甚大な意味を持つ。特に「不便の理由」として候補者の「運動の混乱」二つの「選挙の混乱」を挙げた者が全体の

6割弱もあり、その人達の多くが交叉投票者であるという事実は、異なる選挙毎に固有の制度的意義・争点・人物で争われるべき民主的選挙の過程を一元化し、党派的「相乗り選挙」を行なって権勢拡大を企ろうとした政権政党に対する警鐘として受けとめられるべきである。

四、おわりに

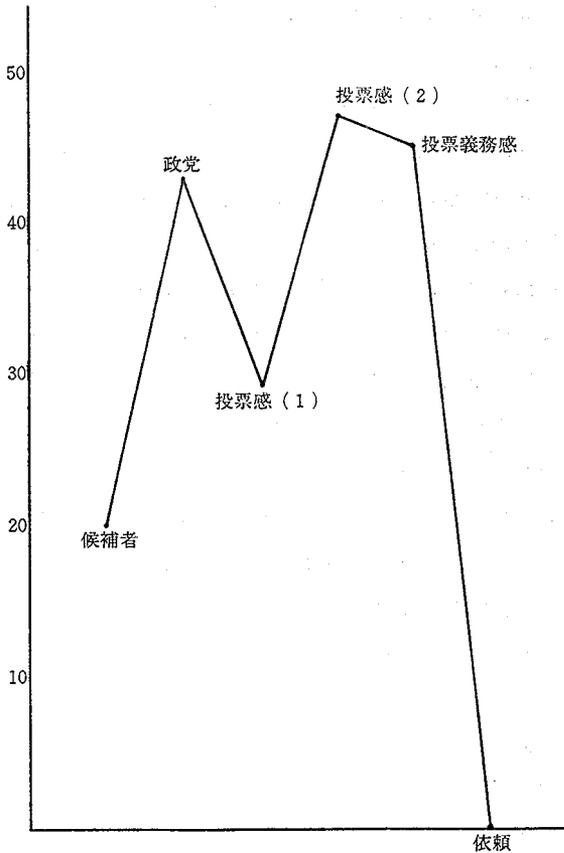
選挙の同日執行は相乗効果によって参院にも自民の勝利を齎したとはいえ、偶然的要素に支配されることもある解散制をもつ衆議院と任期満了選挙による参議院とが今後とも同日選挙という形で邂逅があるとは限らない。そこで自由民主党は、同日選挙後、選挙公営の拡大とあわせて比例代表制の導入案等参院全国区制の改革をめざす動きを再開している。ともあれ、制度改革あるいは同日選挙いずれの方法も、「衆議院と参議院とで多数党が異なる場合には困難な事態が予想されるので、両院の政党状態を揃える⁽¹³⁾」という政権政党の党派的意図に裏付けられたものであろう。事実全国区に比例代表制を導入した場合自民有利となるという試算⁽¹⁴⁾が随所に公表されている。ここで選挙制度改革の問題を論じる余裕はないが、全国区では候補者即ち「人」を重視する有権者が衆院の場合より多いだけでなく、その人達の実に6割が衆院、参院地方区で投票した政党と異なる党または諸派・無所属に全国区で投じているという事実を指摘すれば十分であろう（第八表参照）。

同日選挙という方法に立ち帰ってみると、日本の両院制の立憲的観点からの批判も様々にあるだろうが、特に参議院選挙の投票率が機械的に上昇したという点に注目しておこう。棄権防止運動等も含めて日本の選挙の投票率の上昇は有権者が政策的・党派的に動機づけられて生ずるものだけではないことが以前から指摘されて来た。むしろ投票を権利の行使ではなく義務と考える日本固有の政治文化から発するところが大きい。投票を途中でやめて参院のみ棄権するという事は「勇気⁽¹⁵⁾」がいることなのである。

本調査では投票者に対して、衆・参両院を通じて今度の選挙で投票した「気持」を聞いた。それが「投票理由」として第二十三表、二十三図に示してある。回答は、当選させたい「候補者」がいた（完全一貫票率20%）、もりたてたい

第二十三表 投票理由

	I	II	III	IV	V	棄権	n	χ^2	df
投票理由								24.11	20
候補者	33	27	20	—	20	—	(15)		
政党	—	14	43	—	43	—	(7)		
投票感(1)	29	43	—	—	29	—	(7)		
" (2)	22	16	9	7	47	—	(45)		
投票義務	27	15	8	5	45	2	(67)		
依頼	25	50	25	—	—	—	(4)		



第二十三図 投票理由 (完全一貫票率)

「政党」があった(43%)、今の政治を改めたいと思った(「投票感(1)」29%)、政治改革のためには投票することが大事(「投票感(2)」47%)、投票は国民の「義務」(45%)、たのまれた(「依頼」0%)と分布している。一見優等生の回答をした「投票大事」感保有者と投票義務感保有者とは、自分が参加する選挙に対する権利意識が低く外的規範の強制によって投票する層であるという意味では共通した面がある。この両者で全体の8割近くを占める(行の度数)ということ自体問題であるが、その上彼らが高い完全一貫票率を示していることも見逃せない事実である。他方民主的意識水準の高い回答と考えられる「候補者」、「投票感(1)」、「政党」は僅かに全体の20%、特に前二者の一貫票率は非常に低だけでなく、全国区投票政党(勿論無所属を含む)で逸脱する傾向が強いのである。

上にみて来たように、日本人は高い参加の態度と党派性に支えられた投票行動を示さない。高度の参加の伝統を持つ国々に見い出されるもの⁽¹⁶⁾と異なっており、日本の政治参加の伝統は態度を欠いた義務感によって支えられた行動である。福岡の田園都市甘木で74年参院選で調査が行なわれたが、そこでも投票大事・義務感を持つ人々が標本全体の64%を占めているのが見い出された。しかもその多くが保守系支持であった⁽¹⁷⁾。同日選挙という戦略⁽¹⁸⁾は、極端にいえば市民の遅れた参加意識を持つ人々を啓発するどころか盲目的に同一政党に投票することによって「義務」を果させるという結果を生んだ。他方、候補者個人に対する評価を尊重する人、政治改革意識の高い市民は全国区においてこれに抵抗したといえるだろう。

注

- (1) 高松市市長公室統計課、『昭和50年国勢調査結果(No. 1)、(No. 2)』昭和52年7月、昭和53年3月、高松市市長公室行政資料課、『高松市統計年報(第18号)』昭和54年10月。
- (2) J.G. Rusk, "The Effect of the Australian Ballot Reform on Split Ticket Voting: 1876-1908", *American Political Science Review*, Vol. 64, No. 4, pp. 1223-5.
- (3) 高松市選挙管理委員会、『昭和55年8月選挙の記録』。
- (4) 三宅一郎他著『異なるレベルの選挙における投票行動の研究』昭和42年、490-

501頁, では党派別, 保革別に分類してある。

- (5) 衆院では, 民社が60年, 公明が76年に候補者を出したことがある。市選管, 前掲書。
- (6) 付録調査表より, Q3-9, Q5-1, Q5 SQ1-1・2・3, Q11-7, Q13-9, Q14-1, Q14 SQ1-1・2・3, Q16-7, Q18-9, Q19-1, Q19 SQ1-1・2・3, Q20-2, Q27-1・2・3・4・5・6・7・8, Q28-1, Q32-1 にそれぞれ1点を与えた合計。
- (7) G. ライプホルツ, 阿部照哉他訳『現代民主主義の構造問題』1974年, IV。
- (8) 沖野の分類によると香川一区「準都市型」, 二区「準農村型」である。沖野安春「総選挙結果の選挙区類型別分析」(柚 正夫編『国民の選択』1972年所収), 252頁。
- (9) A. Campbell and W. E. Miller, "The Motivational Basis of Straight and Split Ticket Voting", APSR, Vol. LI, No. 2, 1957, p. 312.
- (10) Ibid.
- (11) 柚 正夫『日本の選挙』1967年, 215頁。
- (12) L. W. ミルブレイス, 内山秀夫訳『政治参加の心理と行動』1976年, 32-4頁。
- (13) 丸山 健「参議院と政党」(『ジュリスト』No. 393, 1968年所収), p. 40 から重引。
- (14) 例えば『朝日』(1980年8月11日)。
- (15) 西平重喜『日本の選挙』昭和47年, 70頁。
- (16) ミルブレイス, 前掲書, 84頁。
- (17) 柚 正夫『政治意識と選挙行動の実態—農村の選挙過程の都市化状況・福岡県甘木市一』昭和51年, 32-3頁。
- (18) 同日選挙のもたらした「相乗効果」は, アメリカの大統領選挙と上・上両院選挙・地方選挙が重なることによって生ずる「コートテール効果」を髣髴させるものがある。かかる「効果」があるが故に両院同日選挙は自民主流による「仕組まれた」ものであるという説, 党主流は反対であり偶然による解散という事態によって同日執行となったという説などが出ている。『朝日ジャーナル』(1980年5月30日号), 7頁, 外山四郎「新政治構造への深層潮流を探る」(『中央公論』1980年7月号) 155-8頁, 加藤博久編著『衆参同日選挙の多角的分析』昭和55年, 3~6頁。コートテール効果と同日選挙との間のアナロジーによって, 推測される限りでの有権者の投票行動に対する効果を挙げておく。第一に, 二つ以上の選挙が重複すると投票率の高い方の重要な選挙に合わせて他選挙の投票率が上昇する。しかも選挙の関心は重要な方の選挙に集れんし他選挙における固有の関心が収縮する。アメリカでは重要な方の選挙は大統領選挙だが日本では下院優位の原則上衆院選挙である。その結果前者が国政関心に集れんするのに対し日本の場合選挙区と多数党の構造上地方的関心がむしろ優位する。第二に, 重要な方の選挙で有利な政党は他の選挙でも有利となる。「首相の死」がこの役を果たすように, 一つの選挙で党派的有利性をもつ要因が他選挙で争われるべき問題を決定するこ

とになるのである。このように、同日選挙が選挙民の行動に重要な影響をもっていることから、アメリカでは、市政改革派が「候補者の選択の自由」、「候補者の地方問題に対する判断の自由」を求めて国政選挙と地方選挙を分離することを主張して来た。現在でも尚、大統領選挙年から州知事選を分離する動きが根強いといわれている。選挙の国政・地方という組み合わせは異なるとはいえ、一貫投票という盲目的党派行動がアメリカ的自由主義の立場からは忌避されているのである。コートテール効果については、L. H. Bean, *How to Predict Elections*, 1948, chap. 4, M. C. Cummings, Jr. and D. Wise, *Democracy Under Pressure*, 1977 (3d ed.), pp. 314-20.

Q2. こんどの選挙は衆参両院が同時に行われたわけですが、はじめに衆議院の選挙についてお聞きします。

あなたは、6月22日の衆議院選挙で投票しましたか。

1 91.6 投票した → (Q3へ)
2 8.4 投票しなかった ↓

S0. 投票しなかったのは何故ですか。このなか (回答2) からもっとも大きい理由を1つ選んで下さい。

- 3.0 1 (ア) 用があつたから
- 0.6 2 (イ) 期満だったから (身体障害のためふもふむ)
- 0.6 3 (ウ) 面倒だったから (遠いからふもふむ)
- 2.4 4 (エ) 選挙にあまり関心がなかつたから
- 1.8 5 (オ) 政黨や候補者の人物などについて事情がよくわからなかつたから
- 6 (カ) 適当な候補者がいなかつたから (支持する政黨の候補者がいない、どの黨も支持できない)
- 7 (キ) 系一人が投票してもしなくても同じだから
- 8 (ク) 選挙によつては政治はよくなるらないと思つたから
- 9 (ケ) 今住んでいるところに選挙権がないから
- 10 その他
- 11 不 明

(投票しなかつた者は08へ)

Q3. あなたが、衆議院でたれば投票するかを決めるのに決め手になつたのはどれですか。このなか (回答表) から主なものをも1つだけあげて下さい。

- 1 12.5 家族と相談して (イ) 知人からすすめてもらつて (ウ) 選挙を聞かされて (エ) 組合や団体のすすめ
- 4 8.6
- 7 0.0 町内・区会の選挙公報を届けて (キ) ビラや葉書を見て (ク) 候補者からの文書によつて
- 9 15.8 10 12.5 11 3.3 12 2.6 13 3.9 14 3.3 15 2.0 16 2.0
- (ア) 政黨を覚えて (イ) 人物がいから (ウ) 候補の詳しさがよいから (エ) その他 (フ) 不明

地点番号	対象番号	調査項目	名

衆議院議員補選と参議院議員補選について
世論調査 (各カテゴリーの度数の%も含む)

香川大学政治学研究所から世論調査がありました。この世論調査は6月22日におこなわれた衆参両院同時選挙のことについてお伺いして、統計資料にするのが目的です。

お答えいただいたことは全部統計表にまとめますので、名前も出ませんし、また絶対に個にもれることはありませんから、率直なお考えをお書きください。どうしても書えられないときは「わからぬ」とおっしゃっていただいても結構ですので、どうかよろしくお願いたします。

Q1. 今度の選挙は、全体として明るくきれいな選挙が行われたと思えますか。それはいいえぬいと思えますか。

1 38.0 (%) 2 38.0 3 15.1 4 9.0
明るくきれいな行わ そろはいいえぬい 一概にいえない 不 明
れた
→(Q2へ) →(Q2へ)

S0. 今度の選挙が明るくきれいな行われなかつたのは、主としてこのなかの(回答表1) どれに責任があると思えますか、1つ選んでください。

- 1 4.8 選挙民 (イ) 候補者 (ウ) 政黨 (エ) 選挙制度
- 5 12.0 選挙運動のやりかた その他 7 0.6

Q18. あなたが、全国区でたれに投票するかを決めるに決め手になったのはどれですか、このなか(回答票3)から主なものを1つだけあげてください。

- 1. 11.6 (ア) 参議院
- 2. 14.3 (イ) 知りあひ
- 3. 2.0 (ウ) 親族
- 4. 15.0 (エ) 組合や団体の甲しあひ
- 5. 0.0 (オ) 新聞
- 6. 10.2 (カ) ビデオ
- 7. 1.4 (キ) ビデオ
- 8. 1.4 (ク) 候補者から
- 9. 11.6 (ク) 政党を
- 10. 16.3 (ク) 新聞
- 11. 1.4 (カ) 新聞
- 12. 3.4 (カ) 新聞
- 13. 4.8 (カ) 新聞
- 14. 4.8 (カ) 新聞
- 15. 2.0 (カ) 新聞
- 16. 3.4 (カ) 新聞
- 17. 1.4 (カ) 新聞
- 18. 1.4 (カ) 新聞
- 19. 1.4 (カ) 新聞
- 20. 1.4 (カ) 新聞
- 21. 1.4 (カ) 新聞
- 22. 1.4 (カ) 新聞
- 23. 1.4 (カ) 新聞
- 24. 1.4 (カ) 新聞
- 25. 1.4 (カ) 新聞
- 26. 1.4 (カ) 新聞
- 27. 1.4 (カ) 新聞
- 28. 1.4 (カ) 新聞
- 29. 1.4 (カ) 新聞
- 30. 1.4 (カ) 新聞
- 31. 1.4 (カ) 新聞
- 32. 1.4 (カ) 新聞
- 33. 1.4 (カ) 新聞
- 34. 1.4 (カ) 新聞
- 35. 1.4 (カ) 新聞
- 36. 1.4 (カ) 新聞
- 37. 1.4 (カ) 新聞
- 38. 1.4 (カ) 新聞
- 39. 1.4 (カ) 新聞
- 40. 1.4 (カ) 新聞
- 41. 1.4 (カ) 新聞
- 42. 1.4 (カ) 新聞
- 43. 1.4 (カ) 新聞
- 44. 1.4 (カ) 新聞
- 45. 1.4 (カ) 新聞
- 46. 1.4 (カ) 新聞
- 47. 1.4 (カ) 新聞
- 48. 1.4 (カ) 新聞
- 49. 1.4 (カ) 新聞
- 50. 1.4 (カ) 新聞

Q19. 全国区では、あなたは政党の方を重くみて投票しましたか、それとも候補者個人を重くみて投票しましたか。

- 1. 1.4 (ア) 政党を重くみて
- 2. 1.4 (イ) 候補者個人を重くみて
- 3. 1.4 (ウ) 政党を重くみて
- 4. 1.4 (エ) 候補者個人を重くみて
- 5. 1.4 (オ) 政党を重くみて
- 6. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 7. 1.4 (キ) 政党を重くみて
- 8. 1.4 (ク) 候補者個人を重くみて
- 9. 1.4 (ケ) 政党を重くみて
- 10. 1.4 (コ) 候補者個人を重くみて
- 11. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 12. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 13. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 14. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 15. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 16. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 17. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 18. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 19. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 20. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 21. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 22. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 23. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 24. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 25. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 26. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 27. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 28. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 29. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 30. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 31. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 32. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 33. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 34. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 35. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 36. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 37. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 38. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 39. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 40. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 41. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 42. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 43. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 44. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 45. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 46. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 47. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 48. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 49. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて
- 50. 1.4 (カ) 候補者個人を重くみて

Q17. あなたが、全国区でその人に投票することになったのは投票日の何日ぐらい前でしたか、このなか(回答票8)からお答え下さい。

- 1. 11.6 (ア) 投票当日
- 2. 14.3 (イ) 投票日の前日
- 3. 2.0 (ウ) 投票日の2、3日前
- 4. 15.0 (エ) 投票日の4日以上前
- 5. 0.0 (オ) 投票日の出さうな日
- 6. 10.2 (カ) 投票日の前日
- 7. 1.4 (キ) 投票日の前日
- 8. 1.4 (ク) 投票日の前日
- 9. 11.6 (ク) 投票日の前日
- 10. 16.3 (ク) 投票日の前日
- 11. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 12. 3.4 (カ) 投票日の前日
- 13. 4.8 (カ) 投票日の前日
- 14. 4.8 (カ) 投票日の前日
- 15. 2.0 (カ) 投票日の前日
- 16. 3.4 (カ) 投票日の前日
- 17. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 18. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 19. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 20. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 21. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 22. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 23. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 24. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 25. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 26. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 27. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 28. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 29. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 30. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 31. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 32. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 33. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 34. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 35. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 36. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 37. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 38. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 39. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 40. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 41. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 42. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 43. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 44. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 45. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 46. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 47. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 48. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 49. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 50. 1.4 (カ) 投票日の前日

Q16. 全国区の選挙で、その人に投票した主な理由はなんですか。このなか(回答票9)から一番あてはまると思われるものを1つあげて下さい。

- 1. 1.4 (ア) 相手の利益を代表しているから
- 2. 1.4 (イ) 相手の立場を代表しているから
- 3. 1.4 (ウ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 4. 1.4 (エ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 5. 1.4 (オ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 6. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 7. 1.4 (キ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 8. 1.4 (ク) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 9. 1.4 (ケ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 10. 1.4 (コ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 11. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 12. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 13. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 14. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 15. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 16. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 17. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 18. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 19. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 20. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 21. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 22. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 23. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 24. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 25. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 26. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 27. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 28. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 29. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 30. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 31. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 32. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 33. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 34. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 35. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 36. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 37. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 38. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 39. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 40. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 41. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 42. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 43. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 44. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 45. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 46. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 47. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 48. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 49. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから
- 50. 1.4 (カ) 生活の上でいろいろの利益を代表しているから

Q17. あなたが、全国区でその人に投票することになったのは投票日の何日ぐらい前でしたか、このなか(回答票8)からお答え下さい。

- 1. 11.6 (ア) 投票当日
- 2. 14.3 (イ) 投票日の前日
- 3. 2.0 (ウ) 投票日の2、3日前
- 4. 15.0 (エ) 投票日の4日以上前
- 5. 0.0 (オ) 投票日の出さうな日
- 6. 10.2 (カ) 投票日の前日
- 7. 1.4 (キ) 投票日の前日
- 8. 1.4 (ク) 投票日の前日
- 9. 11.6 (ク) 投票日の前日
- 10. 16.3 (ク) 投票日の前日
- 11. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 12. 3.4 (カ) 投票日の前日
- 13. 4.8 (カ) 投票日の前日
- 14. 4.8 (カ) 投票日の前日
- 15. 2.0 (カ) 投票日の前日
- 16. 3.4 (カ) 投票日の前日
- 17. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 18. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 19. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 20. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 21. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 22. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 23. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 24. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 25. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 26. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 27. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 28. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 29. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 30. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 31. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 32. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 33. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 34. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 35. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 36. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 37. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 38. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 39. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 40. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 41. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 42. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 43. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 44. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 45. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 46. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 47. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 48. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 49. 1.4 (カ) 投票日の前日
- 50. 1.4 (カ) 投票日の前日

Q23. あなたは、おだん（選挙の時でなく）政党や議員が聞く演説や報告会などに出られることがありますか。

出席することがある 1 23.5
ない、不明 2 26.5

Q24. あなたは、何かの問題で政党の支那に相談に行ったり、議員さんに会ったりしたことがありますか。

ある 1 8.4
ない、不明 2 91.6

Q25. あなたは、おだん政党の出している新聞をお読みですか。

(多少の量) 読む 1 45.8
読む 2 53.0
読む 3 1.2
読む 4 0.26

S9. 定期的に投票ですか、時々お読みですか、それともたまたま読む程度ですか。

定期的に読む 1 54.2
時々読む 2 27.7
たまたま読む程度 3 15.7
不明 4 20.5

Q26. あなたは、ここ10年くらいの間、衆議院選挙ですべて同じ政党の候補者に投票してきましたか（注意！候補者がかわっても問題にしない。また選挙権をもつてから10年未満の人には、投票するようになつてからずっと同じかどうかを聞く）。

ずっと同じ政党 1 50.8
政党を変えた 2 27.7
今初めて選挙権をもつた 3 9.6
不明 4 11.8

S9. それはどのような理由からですか、このなか（回答票1より主なものをお1つ選んで下さい）。

- 3.6 (1) 今まで投票してきた政党の活動にあきたらなくなつたから
- 3.0 (2) 別の党の候補者の方がましに思えるようになったから
- 3.6 (3) 別の選挙区が候補者かたから
- 4.0 (4) 別の選挙区が候補者かたから
- 4.0 (5) 別の選挙区が候補者かたから
- 3.6 (6) 別の選挙区が候補者かたから
- 3.6 (7) 不明

Q27. あなたは、おだん何党を支持していらっしゃいますか。

自民党 社会党 公明党 共産党 民社党 新自 社民連 その他 支持政党 不明
1 41.6 2 20.5 3 1.2 4 1.8 5 1.8 6 0.0 7 0.0 8 0.0 9 25.3 10 7.8

(衆議院又は参議院で投票した者に聞く—どちらも投票しなかつた者はQ22へ)

Q20. この年の選挙で投票に行かれたのはどういう候補からですか。このなか（回答票0）から1つだけ選んで下さい。

- 10.0 (1) どちらでもない当選させない候補者がいたから
- 4.7 (2) もりたてたい候補者があつたから
- 4.7 (3) 今回の政治がよくないで、それを改めたいと思つたから
- 30.0 (4) 今回の政治をよくするために、投票することが大事だから
- 44.7 (5) 投票するのは国民の義務だから
- 2.7 (6) 団体、組織、知りあひに促されて
- 1.3 (7) その他
- 2.0 (8) 不明

Q21. 今回の選挙で、だれに投票するかを決めるさいに、どのような問題を考えて入れて決めましたか、このなか（回答票1）から、もっとも重要だと思ふものから順番にいくつでも結構ですからあげて下さい（調査員は順に番号をつける）

- 1 () 2 () 3 () 4 () 5 () 6 () 7 () 8 ()
- 29.1 (1) 2.6 (1) 29.8 (1) 8.6 (1) 1.3 (1) 1.3 (1) 2.6 (1) 4.0 (1)
- 9 () 10 () 11 () 12 () 13 () 14 () 15 ()
- 4.0 (1) 1.3 (1) 6.0 (1) 0.7 (1) 0.7 (1) 2.0 (1) 1.3 (1)
- 石油・エネルギー 防衛問題 政府腐敗問題 教育 文化 その他
- 公平対策 選挙は考へないか

(全員に聞く)

Q22. あなたは、議員や候補者を支持する団体に加入されていますか。... 国政選挙だけでなく、どの選挙のさいの団体でも結構です。

加入している 1 10.3
加入してはいない 2 79.5
不明 3 1.2

S9a. 加入しておられるのは、1つ、2つ、3つ以上ですか、2つ以上ですか、3つ以上ですか。

1 12.0 2 7.2 3 3
1 12.0 2 7.2 3 3

S9a. 加入しておられるのは、1つ、2つ、3つ以上ですか、2つ以上ですか、3つ以上ですか。

1 12.0 2 7.2 3 3
1 12.0 2 7.2 3 3

Q28. では反対に、この政党だけは支持したくないという政党はありますか。
 1 56.6 2 36.7 3 6.6
 ↓ ↓ ↓
 ある ない 不明 →(Q29へ)

Q29. それは何党ですか
 1 4.2 2 0.6 3 13.3 4 33.7 5 0.0 6 0.6 7 0.0 8 2.4 9 2.4
 自民党 社会党 公明党 共産党 民社党 新自公 社民連 その他 不明

Q30. 日本人の生活程度をこのように段階に分けるとすれば (回答票13)、あなたの生活程度はどれくらいだとお思いですか。
 1 0.0 2 5.4 3 53.0 4 30.1 5 6.6 6 4.8
 (ア) 上 (イ) 中の上 (ウ) 中の中 (エ) 中の下 (オ) 下 不明

Q31. あなたは、現在のご自分の生活にどの程度満足していますか (回答票14)。
 1 6.0 2 57.8 3 27.7 4 4.2 5 4.2
 (ア) 十分満足 (イ) だいたい満足 (ウ) 満足 (エ) まだよく不満 不明
 足している 足である 足である 足である

Q32. 政党や政治家の政治資金は、田舎個人からの献金でまかなうのが理想とされている。もし、企業や労働組合の献金が禁止されて、個人の献金一本になった場合、あなたは、自分の支持する政党や政治家のために充分の献金をするお気持がありますか。
 1 14.5 2 72.9 3 9.6 4 3.0
 ある ない 不明 その他

Q33. 昭和50年の公衆選挙法の改正で、議員や立候補予定者が選挙区の人々へ金を出したり、ものを贈ったりすることが禁止されました。この辺では、このことは守られているでしょうか、それともあまり守られていないでしょうか。
 1 48.2 2 28.3 3 23.5
 守られている あまり守られていない 不明

(選挙運動など)
 Q34. 選挙を閉るくきれないものにするための活動がいろいろの団体によって行われています。そのような活動についてあなたはご存知ですか。
 1 49.4 2 46.4 3 4.2
 知っている 知らない 不明

Q35. このどの選挙は選挙史上初めの衆参両院の同時選挙になりました。これについて、あなたは何か不便を感じましたか、それともそんなことはないと思いますか。
 1 26.5 2 73.5
 不便を感じた 感じなかった
 ↓ ↓
 不便を感じた →(Q36へ)

Q36. それはどのようなことですか。このなか (回答票16) からあげて下さい (M. A.)
 4.2 1 (ア) 多くの候補者の運動があつて煩わしかった
 0.6 2 (イ) テレビの番組に選挙関係のものが多かつた
 10.8 3 (ウ) 二つの選挙の候補者の運動が重なつて、区別がつけにくかつた
 5.4 4 (エ) どの選挙にどれを投票したらよいか迷つた
 3.6 5 (オ) 投票を何度もするは面倒かつた
 1.2 6 その他
 0.6 7 わからな

Q37. あなたは、現在の政治に対してどの程度満足していますか (回答票15)。
 1 1.2 2 17.5 3 56.0 4 16.9 5 8.4
 (ア) 十分満足 (イ) だいたいの (ウ) やや不満 不明
 している ところ満足して 足である 満足である

Q38. 政治の金による腐敗や公職の不当な支出が行われている
 10.2 1 (ア) 腐敗が激しく国民の選挙権を侵害している
 10.2 2 (イ) 腐敗が激しく国民の選挙権を侵害している
 0.6 3 (ウ) 選挙改革がよくな
 0.6 4 (エ) 外資政策がよくな
 13.3 5 (オ) 物産政策がよくな
 12.7 6 (キ) 社会福祉への力の入れ方が足りない
 6.6 7 (ク) 国民の願いをよくくみあげていない
 1.8 9 その他
 1.0 不明

Q39. どの選挙は選挙史上初めの衆参両院の同時選挙になりました。これについて、あなたは何か不便を感じましたか、それともそんなことはないと思いますか。
 1 26.5 2 73.5
 不便を感じた 感じなかった
 ↓ ↓
 不便を感じた →(Q36へ)

Q40. あなたは、現在のご自分の生活にどの程度満足していますか (回答票14)。
 1 6.0 2 57.8 3 27.7 4 4.2 5 4.2
 (ア) 十分満足 (イ) だいたいの (ウ) 満足 (エ) まだよく不満 不明
 足している 足である 足である 足である

Q41. あなたは、現在のご自分の生活にどの程度満足していますか (回答票14)。
 1 6.0 2 57.8 3 27.7 4 4.2 5 4.2
 (ア) 十分満足 (イ) だいたいの (ウ) 満足 (エ) まだよく不満 不明
 足している 足である 足である 足である

Q42. あなたは、現在のご自分の生活にどの程度満足していますか (回答票14)。
 1 6.0 2 57.8 3 27.7 4 4.2 5 4.2
 (ア) 十分満足 (イ) だいたいの (ウ) 満足 (エ) まだよく不満 不明
 足している 足である 足である 足である

Q43. あなたは、現在のご自分の生活にどの程度満足していますか (回答票14)。
 1 6.0 2 57.8 3 27.7 4 4.2 5 4.2
 (ア) 十分満足 (イ) だいたいの (ウ) 満足 (エ) まだよく不満 不明
 足している 足である 足である 足である

Q44. あなたは、現在のご自分の生活にどの程度満足していますか (回答票14)。
 1 6.0 2 57.8 3 27.7 4 4.2 5 4.2
 (ア) 十分満足 (イ) だいたいの (ウ) 満足 (エ) まだよく不満 不明
 足している 足である 足である 足である

